

浄土宗西山禅林寺派

潮音寺だより

http://www.ne.jp/asahi/choonji/namo/ ナモの寺 検索
〒456-0034 名古屋市熱田区伝馬一丁目 10-11

第325号
平成22年11月

電話 052-671-4831

ファックス 052-671-4856

choonji@aichi.email.ne.jp



閑不徹かんふてつ

【出典】『虚堂録』、『嘉泰普灯録』他
曼在頓頭閑不徹 水流洞下太仁生

撮影：超空正道

もし
病気で伏していたり
老いて動けなくなるとも

焦あせるなかれ
腐くもるなかれ

まして
愚ぐ図ずって
周りの者を
困こらすなかれ

閑ひまは
与よえられたもの
楽しむがよい

峰みねに浮かぶ
雲うみを見よ

悠ゆう々ゆうとして
閑しずかにして
ただ無む心

閑不徹かんふてつ

「花のいのちはみじかくて、苦しきことのみ多かりき」と、林芙美子は『放浪記』で語っています。人それぞれが、ドラマティックな人生を歩むとは限りませんが、大小さまざま、間違はなく波のように引いては打ち寄せてくる苦しみからは、誰しも逃れることはできません。

病気になって、床に伏して動けなくなってしまうということも、多くの方が経験される苦しみのひとつでありましょう。私の場合も、胃癌いがんを患い、胃の摘出手術を終えた後、集中治療室で過ごした一夜は、痛さもさることながら、動けないということが不安を増幅させ、とにかく辛つらかったです。しかし、私がそうであったように、回復に希望が持てる場合は、指折

り数えて、「あと、何日間の辛抱」と思えば、その苦しみは限定的なものとなりえます。

ところが、病気の回復のめどが立たない、あるいは、回復が望めない、はた、老いてすべてが衰え、動くことがままならなくなってしまうとしたら、深淵にはまり込んで、もがいてももがいても抜け出せないような、延々と続く無間むけん地獄おに墮おちゆくような苦しみを味わうこととなります。そのような事態に陥ったときには、本人はもちろん、家族全員が、その苦しみを共有することになります。

私の父であり、師匠でもある当山の名誉住職は、この十月二日で九十六才になりました。今から思えば、八十才台の後半ぐらいからだったでしょうか、老いとの本格的な戦いが始まったように思いま

す。怒りっぽくなったり、健常者から見ると、理解に苦しむような行動をとったりするようなこともありました。それが、九十二才の時に転倒し、大腿骨だいたいこつを骨折してからは、介護が必要な状況になり、そして、今年の二月に、心不全、肺炎を患い、長期入院を余儀なくされ、自分の足で歩くことも、自分で食事することもできなくなってしまうました。何度か、三途さんずの川かわ辺まで行つては戻つてくるという状況でありましたが、今では小康状態を保っています。

考えてみれば、病気で寝たままの状態を強いられるということ、は、いわば究極の「閑人かんじん」になるということ。そこで問題となるのは、その「閑」を楽しむか否かということですね。ところが、どうにも「閑人」になりき

れず、苦痛でしかないと感じてい
る間は、「夢をもつ一度」と考え
たり、若い者を呼びつけて叱り
飛ばしたり、周囲を巻き込んで、
忙しさを求めようとしたりして、
厄介やくかいな事態を引き起こしてしまう
こともありがちです。これには個
人差があり、このような期間が、
長い人もあれば短い人もありま
す。喜ばしき長寿を得ることは
裏腹に、どうしても避けては通れ
ない通過点なのだと思えます。

しかし、最近の父を見ていると、
身体のだこどこが痛いとか、不平
をあれこれいうこともなく、実に
穏やかです。しかも、お陰と意識
は確かで、ヨーグルトやプリン
のような物であれば、喜んで食へて
くれますし、毎日、家族が来るの
を心待ちにしてくれれます。明
らかに、意識の変化があり、見舞

う者を和ませてくれるようにも見
えます。話す言葉数が以前に比べ、
少なくなつたせいもあるかもしれ
ませんが、禅語でいうところの、
「閑不徹」という心境にあるよう
に思えるのです。

「閑不徹」とは、『虚堂録』等の
「雲は嶺頭りょうとうに在つて閑不徹、水は
澗下かんかを流れて太忙生たいぼうせい」によるもの
です。『禅語字彙』の解説によれ
ば「雲は閑すずかにして無心、水は忙
しく流れて又無心なり。又上句を
静底、下句を動的の意にいう。閑
不徹は閑徹底、太忙生の生は助辞
なり」ということです。

ただ、禅語というのは受け取る
側によつて、色々な意味に解され
る場合があります。この「雲在嶺
頭閑不徹、水流澗下太忙生」の偈
文も、「動静不二」、「静中動」、あ
るいは「忙中閑あり」といった心

境を表すものと解することが多い
ですが、私は、老いという中で理
解したいのです。間違いと指摘
を受けるかもしれませんが、それ
でもいいのです。現在の父の姿は
「閑不徹」そのものだからです。

私を含め、これから老いてゆく
者にとつて、「閑」は、厄介なも
のを見れば、大いなる敵です。し
かし、若い頃と同じような「忙」
を求めようとせず、「閑」を楽し
むことができるようになれば、
「閑」は良き友となります。中国
の説話に、道に迷つた木こりが、
囲碁いごの一手に何百年もかけて楽し
んでいる仙人に出会つたという話
があります。老いは、悠々ゆうゆうたる
時間を遊ぶものなのでしょう。老
いのただ中にある父が、そのよう
なことを、身をもって教えてくれ
ているような気がするのです。

◎旗はた

梵語では「バターカ」。その音がなまつて生まれた語が「幡はた」。これは、縦長のさまざまな形をした布を下部で金貫にとめて吊す幟のぼしの二種で、仏・菩薩の左右に飾る道具。その幡が、やがて一般の「旗」を指すようになったという。

しかしこの説には異論もあり、布地を「はた」と呼んだことからきたとか、はたはた、はたためくさまからきたという説もあつて定かではない。

現在でも幡は寺院の法会や説法のとくにも飾られるが、たいていは細長く首部が三角形で、裾すそに二数本の脚をたれた形状が一般的である。

◎鉢はち

「すり鉢」「どんぶり鉢」「皿小鉢」「植木鉢」「手水鉢」……の「鉢」である。しかしこの語の意味を正確に定義するのはむずかしい。『広辞苑』には「皿

よりは深くすぼみ、碗わんよりは浅く開き……」とあるが、これでおわかりだろうか？

この鉢という語は、梵語では「ハートウラ」。それを音訳し、鉢多羅と書いたのが略されて、鉢となったのである。

もちろんこの鉢は、僧侶が「托鉢」に用いる食器のこと。托鉢という語は正確に解釈すると、鉢に托す、ことよせるとなり、鉢を出すことにより無言の何かを訴え、要求するということ意味になるのだから。

この鉢にもいろいろの種類があり、釈迦が持ったのは「石鉢」。普通の僧侶は「鉄鉢」や陶土製の鉢を用いたとされ、「木鉢」は外道のものでされていたという。

またこの鉢を逆さまにしたときの形がよく似ているため、頭蓋骨も鉢と呼ばれるようになった。「鉢蓋ぎ」「鉢合

わせ」ということばは、もちろん食器の鉢に布を巻いたり、鉢同士がぶつかることではなく、人間の頭に巻いたり、頭同士がぶつかったりすることの意味であることはいつまでもな。

『仏教のことば』早わかり事典

雑記



▼オスの三毛猫

これまで気付かなかつたのですが、当方に入入りしている昨年生まれの外猫が、オスなのに三毛なのです。ネットで調べたら、出生率は三分の一。ちなみに値段、百万円！ ホントかなあ？

▼漏水

漏水ろうすいがあるということ調べてもらったら、本堂玄関の下ということで、大工事！ 困りました…。

◆動かざる秋の白雲ただ眺む 沐魚